

「終わりの時」の開始直前に地上で見られる出来事 パート1

患難の開始、つまりサタンが天から落とされる直前の、地上の状況はどのような状態になるのかを聖書から考察してみることにしました。

また、天での戦争は、なぜそのタイミングで起きるのでしょうか。

何かそれが勃発するきっかけとなる出来事があるのでしょうか？

天での戦争はどれくらいの期間なのでしょうか？

天での戦争の期間中、地上でも何らかのその影響が見られるのでしょうか？

「黙示録」の記録は、同じ出来事を指す記述と思われるものが、異なった言い回しで、複数ちりばめられているという特徴があります。それらを総合的に分析してゆくと、出来事の時系列が次第に明確になってきます。

それで、今回は、第5番目の封印が開かれた時の記述が、主の日（もしくはその直前も含む）のどの辺りで生じるのかを検討してみたいと思います。

「小羊が第五の封印を開いたとき、神の言葉と自分たちが立てた証しのために殺された人々の魂を、わたしは祭壇の下に見た。

彼らは大声でこう叫んだ。「真実で聖なる主よ、いつまで裁きを行わず、地に住む者にわたしたちの血の復讐をなさらないのですか。」

すると、その一人一人に、白い衣が与えられ、また、自分たちと同じように殺されようとしている兄弟であり、仲間の僕である者たちの数が満ちるまで、なお、しばらく静かに待つようにと告げられた。」（黙示録 6：9-11）

「祭壇の下」に見られたのは、彼らが「犠牲」となったという事でしょう。そして、この証しの為に殉教した「魂」は大声で叫びます。

死んで眠っているのに、叫ぶのでしょうか？、死んでいる人に、「しばらく静かに待つように」と告げるのでしょうか？

一人一人に白い衣を与え、それを着て、引き続き、まだ死んだままでいなさい。という事でしょうか。

それは、あり得ないでしょう。

このタイミングはいつの時点かということですが、「同じように殺される」可能性は後半の三時半の「大患難」の間しか考えられませんので、可能性はその前ですが、前半の三時半の間には、これが生じるとされる、もしくは暗示するような記述さえありません。

従ってそれは、明らかに、患難期が始まる前のタイミングで復活する、と捉えるのが論理的でしょう。

そして、その時点でまだ、復讐は完成していないが、それが終わるまで、まだ暫くある。その間、あなた方と同じように殺されようとする兄弟もいるが、しかし、あなた方自身は、それを見守ることになる。と言うようなメッセージと思われます。

言い換えれば、「実際の行動は少し後になるが、すでにその祈りは、今すでに聞き届けられたので、心配には及ばない。」というのが言外に示されていると考えられます。

(このフレーズは後に記す事柄の伏線になっていますので、これを念頭に置いてパートIIの部分をお読み下さい)

さて、この第五の封印の出来事に匹敵する記述が他に見られるでしょうか。

クリスチャンの「復活」について、知られている記録は、大患難後の「第一の復活です」。では、大患難の前に生じる、「復活」など、あるのでしょうか。

唯一、この出来事に匹敵するできごとと考えられるのは、黙示の12章の次の記述しかありません。

「わたしは、天で大きな声が次のように言うのを、聞いた。「今や、我々の神の救いと力と支配が現れた。神のメシアの権威が現れた。我々の兄弟たちを告発する者、昼も夜も我々の神の御前で彼らを告発する者が、投げ落とされたからである。

兄弟たちは、小羊の血と自分たちの証しの言葉とで、彼に打ち勝った。彼らは、死に至るまで命を惜しまなかった。

このゆえに、もろもろの天と、その中に住む者たちよ、喜べ。地と海とは不幸である。悪魔は怒りに燃えて、お前たちのところへ降って行った。残された時が少ないのを知ったからである。」(黙示録 12：10-12)

この記述から、考察できる1つの点は、サタンが地に落とされることと、クリスチャンの殉教者とが直接関連づけられているということです。

これらのクリスチャンは「悪魔に打ち勝った」と言われていますが、それは「死に至るまで命を惜しまなかった」ことにあると特記し、その勝利の理由が忠実と殉教にあるとしています。

無論、彼らの勝利は、「殺されたまま」にある内は、完全に勝利したとは言えません。

それで、彼らが天に復活したことによって、その勝利が決定づけられることとなります。

そして、そのことと、「天での戦争」が密接な関係があることが分かります。

つまり、彼らの復活こそが、その戦争勃発の引き金になるということでしょう。

ですから、第五の封印開封で復活して、休むように告げられ、白い衣が与えられるのは、彼らは、その時点で、復活し、直後に天に挙げられるゆえに患難を経験しない。つまり、早い復活に与る 14 万 4 千人の人々のことであると考えられます。

さて、患難の前に、「復活がある」という話は、これを読まれる全ての人にとって、初耳であり、「トンデモない」馬鹿げた話と受け止められる方も少なくないことでしょう。これは「患難前携挙説」のことではありません。「携挙」ではなく「復活」です。

前代未聞の事を述べていることは承知していますが、

患難の後に、キリストが臨在して行われるとされる「第一の復活」とは別の復活があることが聖書の中に示唆されています。

(このことはレポート「34 復活の種類と時についての考察」の中で論じていますが、改めてここで、記しておこうと思います。)

それはフィリピ 3：10 ですが、先ず、それを引用しておきましょう。

「キリストとその復活の力またその苦しみにあずかることを知り、彼のような死に服し、何とかして死人の中からの早い復活に達しえないものかと努めているのです。」(フィリピ 3:10 - 11；新世界訳)

ここに「早い復活」という表現が見られます。

実は日本語の聖書翻訳のほとんどは、この部分を単に「死人の中からの復活」と訳していますので、誰が読んでも、「第一の復活」のことだと受け止めると思います。

私が探した、翻訳の中で、唯一、異なった表現で訳しているのが、「回復訳」聖書でした。

(回復訳とは： 新約聖書回復訳はギリシャ語原文に忠実で、どなたにも理解しやすい注解(解説)付き聖書です。回復訳新約聖書の底本は、今までに発見された写本に基づいて決定されたギリシャの原文です。回復訳のほとんどは、Novum Testamentum Graece (26th edition) に見られるネストレ-アランドのギリシャ語テキストに従っています。

<http://www.recoveryversion.jp/>)

そこにはこうあります。

「キリストと彼の復活の力と彼の苦難の交わりとを知り、彼の死に同形化されて、何とかして、死人の中からの※格別な復活に到達するためです。」(フィリピ 3：10, 11；回復訳)

「回復訳」はここを「格別な復活」と訳し、それについて次のような脚注を記しています。
 「すなわち、卓越した復活、特別な復活であって、それは、勝利を得た聖徒たちへの賞です。
 キリストにあって死んだすべての信者は、主の再来の時、死人からの復活にあずかります。
 ところが、勝利の聖徒たちは、その復活の特別な、卓越した分を享受するでしょう」
 (回復訳のスタッフは、タイミングとしては「第一の復活」と同じで、その報いが、他とは異なる格別のもの、と考えているようです。)

さて、では、なぜ、この部分を敢えて、「早い復活」「格別な復活」という不思議な仕方で訳している翻訳があるのでしょうか。

それは、単に「死人の中からの復活」と訳したのでは、明らかに間違いであり、異なった訳し方をすべき理由が、ギリシャ語原文にあるからに他なりません。

パウロが「(格別な) 復活」という言葉としてここで用いているギリシャ語は「エクサアナスタシス」です。これは新約聖書ではここにだけ使われていることばですが、ギリシャ語：アナスタシスは、「起き上がらせること；立ち上がること」(「上へ」を意味するアナと「立つこと」を意味するスタシスからの語) という意味の言葉です。

つまりそれは、「アナスタシス」という語だけで「復活」という意味を持つ語句です。

それに「外に」という接頭語の「エクス」が付いています。

「エクサアナスタシス」は字義的には「外(別)の復活」という意味であると説明されています。ところが、その「外の復活」には、このエクスがついたアナスタシスの語の後にさらにもう一つ「エクス」がついているのです。

「τὴν ἐξανάστασιν τὴν ἐκ νεκρῶν」

(テーン エクサナスタシン テーン エク ネクローン)

外の復活 外に 死

(日本語の字義訳「…死の外への、別の復活」)

この聖句について、Robertson's Word Pictures in the New Testament (ロバートソンの「新約聖書の絵画的描写」(1931年, 第4巻, 454ページ)では、次のような解説をしています。

「明らかにパウロはここで、信者が死者の中から復活することのみについて考慮し、それゆえにエクス[外]という語を2度用いているのであろう。」

人類一般の復活を、ここで度外視し、信者の復活だけに注目させる目的で、それを強調していると言うことですが、この解釈は、パウロの復活に関する他の記述から否定されとも言えます。

次に、パウロが復活について言及している箇所をピックアップします。

パウロは、復活という語を、これ以外に他に九箇所用いています。全て、「復活」は「アナスタシス」であり、「死人の復活」という場合も、「アナスタシス ネクローン」であり、エクスを間に用いているものは1つありません。

(コリント第一 15:12, 13, 21; 15:42 フィリピ 3:10, 11
 テモテ第二 2:18 ヘブライ 6:2 11:35 11:35)

フィリピ 3:11 だけに、エクスが、しかも二度も用いられているということです。

これらの聖句の中の例えば、次の聖句は、「信者」にだけ当てはまるのが明白な記述です。「死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。」(コリント第一 15:42-44)

この「復活」は不滅性、霊的な体の復活の説明であり、明らかに、「信者(クリスチャン)」が復活することのみについて考慮した論議ですが、単に「アナスタシス」を使用しており、「信者のみの復活に言及している故に、エクスが二度使われているという解釈には、全く根拠がないことが分かります。

ともかく、明らかにこの聖句は、死からの、「以外の復活」「別の復活」について言及しているのは確かです。

では、それはどのように受け止めるべきでしょうか。

クリスチャンの復活は、黙示の中で、明確に「第一の復活」であり、彼らは「キリストと共に千年の間統治した」と記しており、そのワンチャンスしかありません。

ですから、「他の復活」は「第一の復活以外の復活」であると捉えるのが論理的であり、聖書に対する忠実な態度と言うべきでしょう。

パウロが、「第一の復活」とは別の「復活」という概念を抱いていたことは、この一連の前後の部分を読んで見るとよく分かります。

また、「第一の復活」とは別の復活があることを示唆する、他の記述を挙げておくとすると、次のキリストの言葉です。

「そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある。」(ルカ 13:30)

ここから分かるのは天の王国に復活する人々は、全員一斉にではなく、時間差があり、しかも、順序の逆転が生じる場合があるということです。

同様のフレーズはマタイ 19章の中にも見いだされます。

「しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」(マタイ 19:30)

そして、さらにこの後、「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。…」

という例え話を語られ、最後にもう一度、「このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」(20:16) と繰り返されています。

同じような言及が、聖書中で何カ所か見いだされますので、このことの重要性は小さくないはずです。ここでも、1つの例え話を用いて、このことが論じられています。

復活が「第一の復活」のみだとすると、この、順番の逆転に関する記述は、意味のないことになってしまいます。

例えば、いわゆる「携挙」と表現される、終末期いるクリスチャンが、死を経験せずに、一瞬にして変えられて、挙げられるということに関する記述ですが、そのタイミングは、「最後のラッパ」の間に、先ず、「第一の復活」があり、引き続いて、携挙があると記されていますので、「復活組」は、この時に、「一斉に」復活させられるのであり、殊更に「順番の逆転」をあえて述べる程の差異はありません。

それで、「後にいる者」である、現代に近い時代の人々、「先にいる者」である西暦1世紀に近いクリスチャンの復活に先立って「王国に入る」可能性について述べられています。これは明らかに「第一の復活」とは別の先行する「別の復活」があることを示唆していると言えるでしょう。

パウロは、「先にいる者」ではあっても、キリストのような死に服すことにより「何とかして」その別の復活に「達しえないものか」と考えていたのでしょうか。

それで、フィリピ 3:11 のこの部分を訳すに当たり、「格別な復活」という訳語は、かなり原文を正確に表現していると思います。

しかし、「早い復活」と訳す根拠はありません。ギリシャ語原文には時間的、タイミング的なニュアンスは、存在しません。まあ、「第一の復活」の後と言うことはないのです、間違いでもないと言えます。

それで、信仰と忠実を全うして死の眠りについたクリスチャンは、「第一の復活」に与ることを期待できます。

しかし、「勝利したクリスチャン」つまり、「死に至るまで命を惜しなかつた」人々は、それとは、別の「復活」にあずかる機会があるということです。

但し、患難が始まる以前の人々です。

聖書を注意深く調べて、この「別の復活」が起きるタイミング、あるいはそれを示唆していると思える箇所を探ると、先に述べた、黙示 12 章の、サタン放逐時しかないことが分かります。

そして、これは、「女」が「子」を産んだ時であり、「患難」が生じる直前に「奴隷にするしを付ける」業が完成する時であり、「パウロ」を含む、イスラエルの 12 部族に各部族から 12000 人ずつ選ばれる、14 万 4000 人であると結論付けることができます。

また彼らは、先に復活するものである故に「初穂」と言えます。

「この者たちは、神と小羊に献げられる初穂として、人々の中から贖われた者たちで、その口には偽りがなく、とがめられるところのない者たちである。」(黙示 14:4, 5)

黙示 14 章全体は、「主の日」に起きる事柄を出来事に順序に示している、ダイジェスト版という位置づけになっています。ここでも、彼らは、患難が始まる前に、すでに、子羊と共に天のシオンの山に立っているとして描かれています。

「ここに、神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐が必要である。また、わたしは天からこう告げる声を聞いた。「書き記せ。『今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである』と。」(黙示 14:12, 13)

今日、当のユダヤ人自身も、自分がどの部族なのか分からないという状況がありますが、これは、神が、「勝利したクリスチャン」として、覚えておられ、あるいは記録された人々を、神が復活させる人々であることから、正確に、各部族から 12000 人ずつ選ばれ、王国の王を構成するものとしての公平性が図られるものと思われれます。

さて、この、第 5 の封印に示される、最初の復活と同じ時点の記述であると考えられる、もう 1 つ、黙示録の記録を考慮しましょう。

(パート II では、この出来事とダニエル書と関係を含め、天での戦争時に、地上にどんな影響が見られるかを考察しています。)